

前下脛腓靭帯損傷を合併した若年性 Tillaux 骨折の 1 例

○田中 誠人, 芝野 康司, 河井 秀夫, 濱田 雅之

星ヶ丘厚生年金病院 整形外科

症例は 14 歳の男児。サッカー中に右足関節を過底屈強制され受傷した。初診時レントゲンにて、脛骨遠位外側に大きな転位を伴う骨端部の骨折を認めたため、受傷翌日に観血的整復固定術を行った。術中所見では、皮下直下に転位した骨片が存在し、上下 180° 翻転していた。前下脛腓靭帯は、脛骨付着部より完全に剥離していた。骨片を整復しスクリューにて固定するとともに、前下脛腓靭帯の修復を行った。術後 2 週間の下腿ギブス固定の後、可動域訓練を開始。5 週で部分荷重、7 週で全荷重とし、現在、疼痛や可動域制限は認めていない。

若年性 Tillaux 骨折は、脛骨遠位骨端線損傷の一つであり、足部の外旋時に前下脛腓靭帯の牽引により生じる剥離骨折と考えられている。通常は腓骨により、大きな転位は抑制される。この症例では、骨折の直接の原因とされている靭帯が断裂していることに加え、上下に回転する転位も認めており、従来考えられてきた発生機序とは異なるメカニズムで生じたものと考えられた。

通常の若年性 Tillaux 骨折では、関節鏡視下に整復し、透視下に固定する報告が近年なされており、当科でもこれに準じた治療を行っている。しかしながら、本症例では転位が著明であったことから、観血的手術を選択し、前下脛腓靭帯が破綻しているのが確認された。転位の大きい若年性 Tillaux 骨折では、前下脛腓靭帯の修復も考慮に入れた術式の選択が必要と考えられた。